

新体詩歌集

088013-000-0

特64-803

新体詩歌集

宇都宮 源平/編

M19

DBG-0110



4570

尾岸土田君題字

新體詩歌集

蘆城愛文舍

特64 803

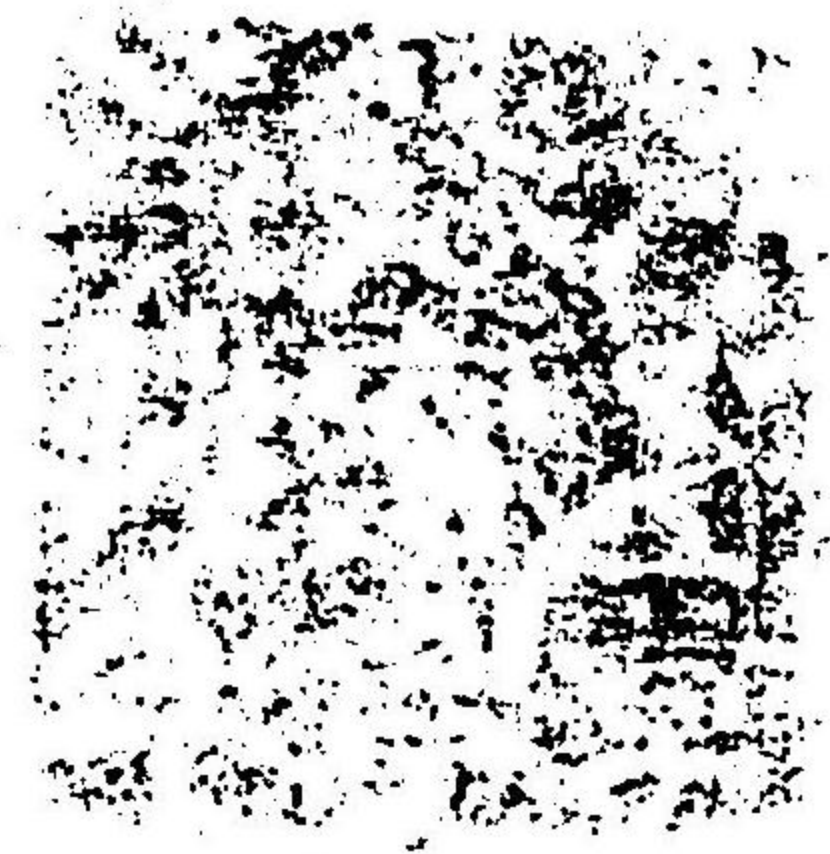


新體詩歌集

南皋土田君題字

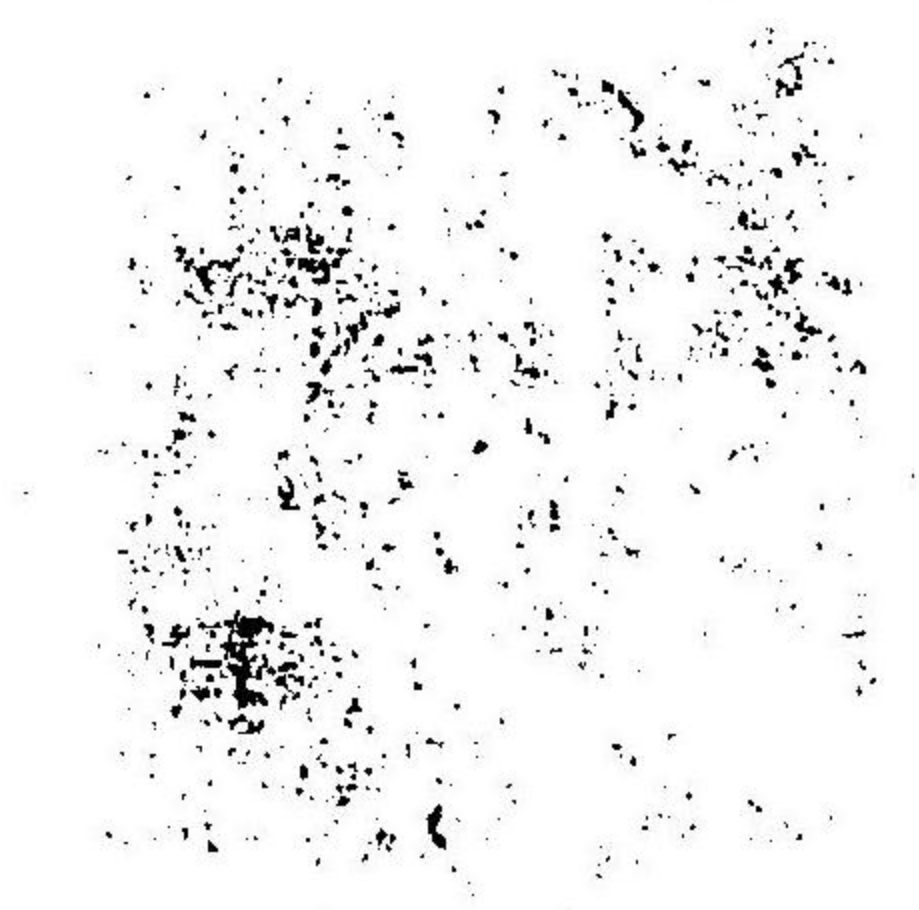
明治十九年七月十三日  
內務省書局  
166

蘆城愛文舍



111

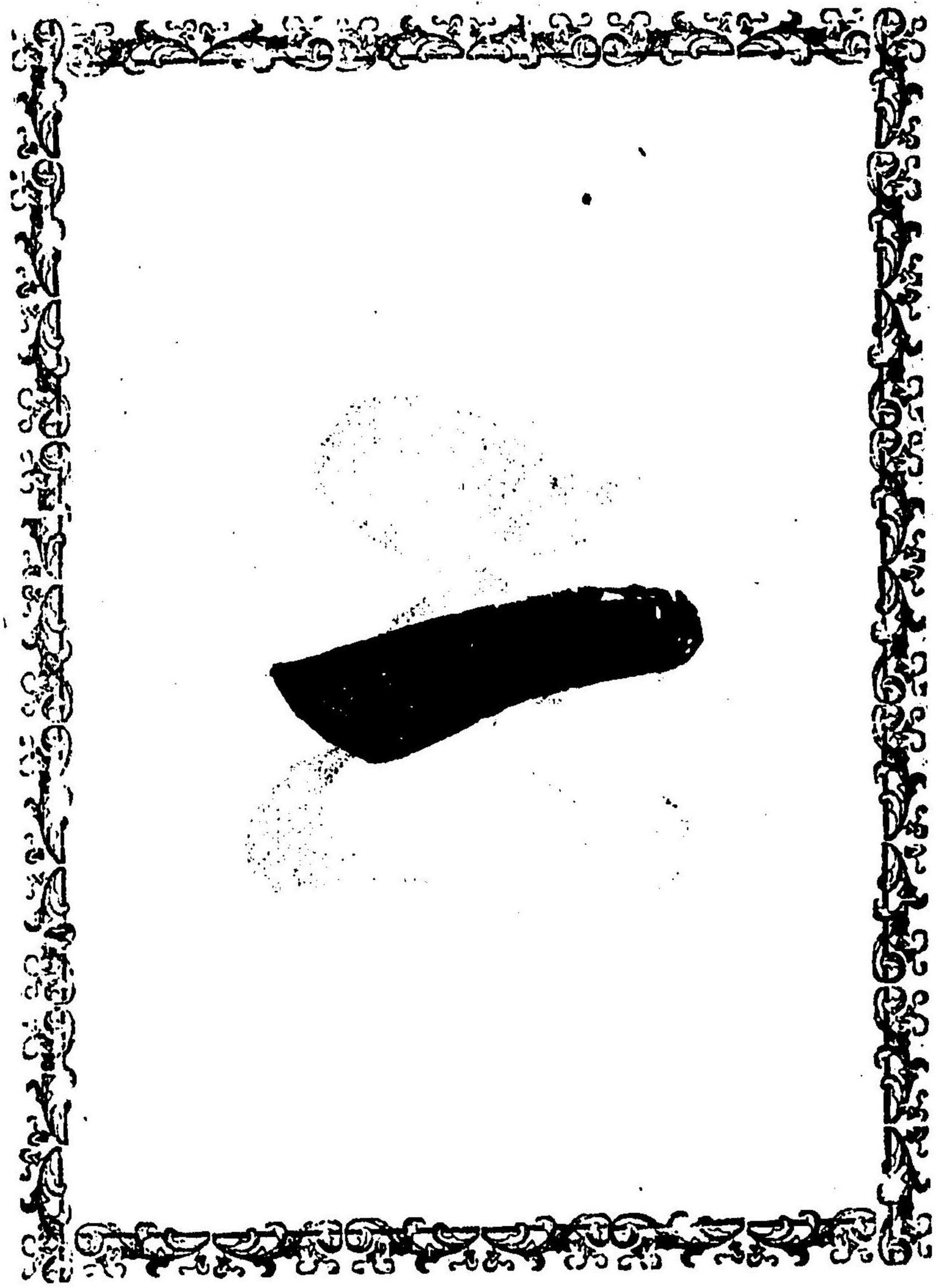
茶





茶

子





卷

百成之日之院

菊の園

蓮



身體詩歌集目錄

- 熊谷直實曉に敦盛ヲ追ふの歌
- 楠正成櫻井驛に於て正行へ遺訓を歌
- 月照僧の入水をいゑみて讀めるを歌
- 自由のうた
- ヘンリー四世
- 拔刀隊
- 花月を卯陀
- 勸學の詩
- カムプベル氏英國海軍の詩
- 外交の宇多
- テニソン氏輕騎隊進撃の詩
- ロングフェロー氏兒童の詩

- 西南の役を凱陣せし人を祝する此歌
- 小楠公を詠するの詩
- 世渡里乃海
- 送學友歸郷を歌
- 御國茨守禮

以上拾七首

新体詩歌集

○熊谷直實曉に敦盛ヲ追ふの歌  
 抑も熊谷直實の。征夷將軍頼朝公の御内よ  
 關東一は旗頭。智勇兼備の大將と  
 世も知られし勇士あり。左れと元暦元年の頃  
 源平須磨の戦ひに。功名あつし物語を  
 聞くも中々あわきなつ。その時平家の武者一騎  
 沖なる船に後れしと。駒を浪間に打入きて  
 一丁許り進みしを。扇を揚げて呼び戻し  
 互にまのぎを削りしが。見れば二八の御顔に  
 花も粧ぬ薄化粧。涅齒かみ黒々と附け給ひ  
 斯るやさしき打扮いでたみよ。君は如何なる御方ぞ

名乗り給へどもあまければ。下とま御聲かんこへさや爽さわかに  
 我こそは参議經盛乃三男。無官乃大夫敦盛ぞ  
 早々首を穿たれよと。西に向ひて手を合せ  
 流石にあまき熊谷を。我が子の事はて思ひやり  
 落める涙とどくはらず。鎧よろい比袖ひそでに絞しぼまはる  
 是非なく太刀を振り揚て。南無阿彌陀佛の聲諸共に  
 首之前にと落ちまける。無殘や花比替はなひかさへ  
 須磨の嵐に散りにけり。之を菩提ぼだいの種ねとして  
 永々跡を吊ひ申さんと。御なき體からだに言ひ遺のここし  
 青葉乃笛を取添そへて。八嶋乃陣じんへ送りしは  
 實ひにおさけある武夫ぶゆ乃。心の中ぞあはれぬ  
 そ乃身を遂に。蓮生法師と名のりつゝ  
 都みやこ又登り元祖大師を師に頼み。剃髮ていぼう禪衣ぜんい乃身と成て

晝夜念佛怠なげせず。日出度ひで往生し給ひざり

○楠正成けんせい櫻井驛えい又於て正行を遺訓いしん乃歌  
 建武けんぶの昔むかしと正成せいせい之肌はだの守りまもりを取出し

是は一歳ひととせ都攻の有りし時。下し給ひし綸旨りんしなま  
 之を汝なんぢに與ふはなま。余あま之兎うさぎに角かくなるならば  
 世は尊氏たうじの世よとなまて。敵慮たうりょを惱なやし奉らんは  
 鏡かがみにうつけて見るが如し。さは去いま乍またら正行よ  
 父の子ならば流石たうじにも。忠義ちゅうぎの道みち兼かねて知しは  
 弓張月ゆみはりつきの影暗かげくらや。家名いへなを汚すと勿れ  
 打漏うちろうさきし浪黨なみのうたうを。あはきみ扶助さけあし隱家いんかの  
 吉野よしのの山の奥深おくふかや。月の桂きは漣さざなみや  
 流れを清きよき菊水きくみづの。旗はたを再び翻ひるへし  
 敵たうを千里せんりに逐おひ退ひき。敵慮たうりょを安やすんじ奉れ

呼鳴、敵慮を安んじ奉る

○月照僧の入水をいゑみて讀める歌

平野次郎國臣作

花の都を秋は猶。夕ふべ淋志き風情なり

名は流れたは清水や。落ち來る瀧の乙羽山

秋の葉色の溝志とに。散るや紅葉のちりくくと

亂きものを世に浪花江や。蘆のさはりは繁きとも

猶世のために身をのりくし。盡くさんどても筑紫瀉

波影の岸乃波ならぬ。操をいほか深縁

色は替らぬ青柳の。驛路を越て香椎瀉

たこ此橋を打ち渡り。千代の松原千代かけて

萬代うけて君が世の。千十歳の松によそへつと

神に歩みを箱崎の。社にかけし四ッ文字の

筆の末をよく問へば。延喜の帝畏とこくも

御手をば下とほせまつし。爰もむかしは石疊み

重ねくし白浪の。よせま昔し忘れしと

恨み浦半の片襟。かゝて歎くを憐れなり

沾衣塚沾の衣。吾が身に着ゑる心地せま

やがて博多の假住居。こゝも浪風さはがしを

又行く方は薩摩瀉。沖の小嶋にあそねを

心細くも都にて。誰かあはれと思ふらん

たよるは心筑紫瀉。一人の外に打あけて

語ふ人も浮き枕ら。波路へだて、野間の關屋の關

にせきとめ殺れて又舟に

乗るを夫と寄あだに。波よもられて行く先は

黒の瀬戸てふ名をうしや。頼て鹿兒嶋への鳥

つばき縮めて潛みしか。又木枯の風とおどろきて  
 日向を指して船出せし。日は神無月望かみなしつきぞらの夜の  
 傾々月と諸共に。照りかゝりやまてくもりなき  
 身は大君おほきみの爲にとて。爰に一人の薩摩瀉  
 ぬかなる縁にし前の世きさきに。契も深き船の沖  
 底の藻層もくさとなりぬるを。乗合人も船人も  
 權の掣も露程も。さりとは知らぬ白波た  
 立ちさわげを甲斐どなき。猶東雲あしのいぬの明け鴉  
 なくより外はなかりけつ

## 自由の歌

天には自由の鬼となす。地には自由の人たらん  
 自由よ自由やよ自由。汝ど我れどその中は  
 天地自然の約束ぞ。千代も八千代やちよも末あきて

此世のあらん限りまで。二人が中の約束を  
 いかゞぞ仇に破るべき。さわさりながら世の中は  
 月に村雲花に風。ほゝになほぬは人の身ぞ  
 話せば長いとながら。古き羅馬ろしまの國と聞く  
 その人民を自由にし。共和の政治を立てんぬめ  
 數多あまた乃人のろき苦勞。そきをもち知らで慾のため  
 我權勢を張らんとて再ひ。帝位に昇ると  
 企てたゞしセサルと。その親友の手にかゝり  
 議員乃中又殺された。その親友れいふとどに  
 民を奴隸ごうれになさんより。寧ろセサルを殺さばや  
 我の羅馬を愛するは。親友よりも甚し  
 羅馬の民の望みなら。我身も茲に諸共に  
 捨る命いと易し。佛蘭西國のルイス帝

自由を壓制なさんどて種々に手段を廻せど  
 邪道はひかゝ正道は打ちかつことれなるべさぞ  
 民はいかりは火の如く。又洪水の溢を來て  
 岩をも碎く勢ひに。いと畏くも帝王の  
 黄金をかざす冠の。斷頭機械の上に落ち  
 めはれはかなくなまけるは誰を怨みん壓制の  
 自業自得といふべけれ英吉利國の革命も  
 同じ車の一ツ轆みち昨日の王の今日乃賊  
 コロンウェルが手に持ちし。自由の旗を招たには  
 天をも回らす許りにて。チャールズ王を誅戮し  
 自由乃基を立てた。北亞米利加は合衆國  
 もと英國の民なれど。其發端をたづぬれば  
 自由の人となすたさに。故郷の名殘なごりに氣も止めず

深山荆棘はまだ愚か。人のふみしともなれ  
 あを海原を打ち渡り。見も知まもせぬ亞米利加へ  
 殖民なせし心根は。いかにあはれに思へらめ  
 然るに猶を英吉利の。ほだしの網を離れず  
 暴吾汚吏の壓制に詰り詰りて國の爲め  
 義兵を擧ぐるとさくか。我後れと親も子も  
 死ぬる覺悟で七年の。長の月日の攻守守り  
 遂に敵をば追ひ拂ひ。日出度立てし獨立國  
 ワシントンワシントンの名を負へる都と共に榮へせよ  
 國のやまれや勇まま。嗚呼彼と云ふれと云ひ  
 自由の爲にと昔より。幾多の人の生死別れ  
 又死にわかれするものを。我東洋の人ちやとて  
 土地にかまりはあるれど。かどか心に變るべさ



人の自由といふものは。天地自然の道なるぞ  
つとめよ勵め諸君とよ。卑屈の民と云はるゝな  
余此文をかきおとる。時しも春の夢枕  
眠るをさまは鐘の音の。いとをぎやかに聞へける

○ヘンリー四世

ヘンリー四世の初ランカストルの「ギック」た  
り一日謀反企てし。六万人の將としてリチャルド  
・王と戦ひて。王を俘になしめれば自から立て王と  
なり。四方に逆威を震らひしも皇天いふで亂臣を。  
安穩にして置くべしや禍亂交も起り立ち戦争止  
む時更もなくウエルス人は蜂起せりスツコト人  
の責め入れりヘルセー一家叛逆す。王を暗殺謀は  
ものその數いとも多かりき。議員の權理を打ち守

り王に烈しく抵抗す財政最とも困難し王は人望  
失ひて。健康漸く衰へてその晩年に至りては。自  
から悔ゆるその悪事。心で心責められて。安眠と  
ては片時もなすとならぬ苦きよ。此一篇はこ  
れぞ是れその有様をうつしある。シエキビル  
乃名作ぞ廣き世界のその中に。王者は數は多け  
れとヘンリー四世ならざるを。幾人ありや聞ま  
やし

いと下賤なは我人乃。枕を高く高いびき  
今しも睡るその數は。幾千万もあはからん  
嗚呼うらやまし羨し。眠るの神よ眠り神  
天より我に賜りて。伽すはとこそ云ふべけれ  
如何なる罪のたゝりにや。眠の神に見はあされ

たどへ暫時の間たりとも。胸のきるしさを忘れた  
 ばぶたを閉て眠らんと。いかにすれども眠れず  
 ずも如何なれば眠神。見る影もあさあばら家の  
 くすばまかへる藁の床。むさくるしきもいとはずに  
 心地もよげに横えり。枕のほとりハタノと  
 飛び来る虫の羽音ぞへ。眠を誘ふ助  
 すや／＼眠るものなるも。伽羅沈香をたきあて  
 床に上なほ天蓋は。金襴緞子もて作り  
 眠を誘ふ樂の音は。ふと心地よ之聞ゆる  
 貴人高位の閨までは何とて來ることのなき  
 げも愚かある神ぞかし。何故に斯く見苦るしき  
 不潔な床に横はれ下賤なものと寐はするも  
 王者の床に來らぬぞ。金の時計と號鐘と

比べの者にはならぬのを。はてなぶかしき神は意ぞ  
 ゆる／＼もる。帆柱は。高き上にも身をねる  
 水夫は目をば閉さして。あさけ用指も荒浪や  
 吹き來は嵐すぎまじく。空づまく浪をまきあげて  
 天地とどろく浪音は。死人もさせる程なれ  
 下は無間の地獄なれ。高き柱のそ乃上で  
 浪にゆるめき眠らす。神の力を不思議なる  
 惣身水もひたされて。身を粉にくたく水夫には  
 かくさはがし其折も。眠れ神は付れ添ふ  
 草木も眠れ丑滿時。眠を誘ふその工夫  
 手を替へ品をかめれども。王者の側に來らぬは  
 依怙最負なれ神にこそ。あゝ幸多れ賤が身は  
 寝ろやねむれや羨し。つゞ／＼思ひ合すれば

冠程着た我頭はど。苦しきものは世にあらじ

○拔刀隊

我は官軍我が敵と。天地容れざ我朝敵ぞ  
 敵の大將あるものは。古今無双の英雄で  
 之に従ぬつはもれり。ともに慄悚決死の士  
 鬼神にはじめぬ勇あほも。天の許さぬ叛逆を  
 起せしものは昔より。榮へしめめし何らざるぞ  
 敵の亡ぶる夫はでは。進めやすしめ諸共に  
 玉ちほ劍ぬきほきて。死ぬる覺悟で進むべし  
 皇國の風みくにともものふの。其身を護る靈たまは  
 維新志のかたすあれたる。日本刀乃今更に  
 又世にいづる身のはまき。敵も身方を諸共に  
 刃乃下に死すべきぞ。大和だおしいあるものは

死べき時は今なるぞ。人よわかれて恥かくな  
 てちの亡ぶる夫はでり。すしめや進めもろともに  
 玉ちほ劍ぬき連て。死ぬる覺悟で進むへし  
 前を望めば劍なり。右も左も皆劍  
 のおぎの山に登るのは。未來たこと聞つゆに  
 此世に於てまのあたり。劍の山に登るのも  
 我身乃なせる罪業を。ほすばすために非ずして  
 賊を征伐す我がため。劍乃山も何のその  
 敵の亡ぶ我夫よで。進めや進め諸共に  
 玉ちほ劍ぬきほれて。死ぬる覺悟で進むへし  
 劍の光をひらめを。雲間に見ゆる稲妻ぞ  
 四方に打出す砲聲は。天にとどろく雷ぞ  
 敵の刃も伏すものや。あまに碎きて玉の緒の

絶へてとあかしく死する身の。屍は積て山をなし  
 其血と流れて川をなす。死地又入るのも君の爲め  
 てきの亡ぶる夫までは。進めや進め諸共よ  
 玉ちる劔怒きつきて。死ぬる覺悟でとゝむべし  
 彈丸雨飛の間よて。ニツなき身をたままづに  
 進む我身は野嵐に。吹のれて消は白露の  
 はかぬき最後どぐるとも。忠義の爲めに死ぬる身の  
 死して甲斐ある者なれば。死ぬるも更に怨みなし  
 我と思はん人達は。一步も後へ引く勿れ  
 てきの亡ぶる夫はでは。進めや進め諸共に  
 玉ちる劔ぬきつれて。死ぬる覺悟で進むべし  
 我今爰に死ぬるは。君のためなり國の爲  
 捨つべきを乃の命なり。たとひ屍は朽るとも

忠義のためにとてし身の。名は芳はしく後の世に  
 永く傳へて残らん。武士と生れぬ甲斐もなく  
 義もなき犬と云はるゝな。卑法な者ととらられな  
 敵の亡ぶる夫までは。進めやすゝめ諸共よ  
 玉ちる劔ぬきつれて。死ぬる覺悟で進むべし

○花月花歌

月と花とは昔よ。誰が樂よぬ人やある  
 たがよろこばぬ人やある。さつななが花月花も  
 心につれてりさつとの種となるを多からん  
 足柄山の風すこや。松風にそる簫の音も  
 こきよと遠く奥州へ。いくさといへば身の末は  
 死か生るか白河の。關をば雲や隔りせん  
 勿來の關の春のやれ。駒をどゝめてながむれば

都の空は花ぐもり。鎧の袖に散かゝる  
 櫻の雪は將軍の。鬢の霜より尙白し  
 戟の枕に夜は慣れて。秋のあはれも知らざれど  
 越山の月のいと白き。雲間を渡る雁が音も  
 故郷の空にかへるぞと。思へと我をなつかま  
 花の都はあれえて。何處が我身のおきどころ  
 今宵一夜の宿頼む。櫻の露に袖ぬれて  
 滅亡爰よきはほりて。平家の末を悲えけれ  
 ぬい人ばらの讒により。諫めの言を容れられず  
 二人ともなき賢臣は。筑紫の浦のわびすまひ  
 御衣を拜して涙ふる。心の底は如何あらん  
 我君今は賊のたえ。遠に嶋ぢに行玉ふ  
 無念の心やはせあく。十字をしるす櫻の木

我が赤心を申せん。杯か多言を要すべし  
 月の光や花の香や。幾萬年を経るとても  
 更にかゝるはなきなるに。常なきものは世の治亂  
 月を見て酔ひ花を見て。ぬむれる春の手枕の  
 只一場の夢の間に。空ゆる興廢存亡の  
 世のなり行を無常なれ。若しも世運の拙くて  
 上よは君を煩はし。下には民に苦勞させ  
 國乃亂るゝそむ時と。月乃光にかゝやをも  
 花の色香はにやぬとも。おどたのしみのあるべきぞ  
 されば世間の諸ひとと。しんの心を引起し  
 國の光を東海の。月よまも尙輝らし  
 國のはまきをみよしの。花よまも尙芳えしを  
 すほこそ今のいとめなり。誓て斯もなせし後

樂しき月をして見たや。樂しき花見をきて見たや

○勸學の詩

昔し唐士の朱文公 よに博學の大人ながら

わが學問をすゝめんと 少年 易老乃詩を作り

一生涯は春夜の 夢の如しと嘆きけり

國の東西世の古今 人の高卑を問はずして

學の道に就くものは いかゞ才能ありとて

同じ多少の感慨を 起さぬとの有るへしや

春の初花秋の月 夏のみどり葉冬の雪

都て此世の物事 心をとむる時あらば

わか學藝を省りみて 過る月日を思ふべし

池のみぎはの春草は みじかさ夢を覺ぬまに

軒端に茂るさりの葉は 吹く秋風にさそはきて

此年を半ば過ぬるを 文讀む人は忘らすや

年の月日は長けれど 難波入江の村あし

ひとよの如く思はきて 我身の上のはづかし

螢や雪の光まにぞ 文は讀めども業ならず

昔の人乃學問は 唯一にちの道なれど

なほ賢人の嘆きあり 今は學術多端にて

枝に小枝に求葉まで いかて凡夫の能とべ

さば云ふものゝ諺に 山のはじめは一塊土

海の初めはひとまづく  
心をとめていつまでも  
いかに急げと詮はぬし  
怠らぬこそよかまけれ

あとひ多きに渡らぬも  
身の爲とある多うらん  
唯一藝を修たなば  
蜘蛛に藝あり綱をはり  
蜂に能あま蜜はくる  
何とく蟲に及ばざる

勉た勉めよたもみあを  
難き事とく厭ふなよ  
進み進めよよとみなく  
學の海に舟路あま  
敵の山にしをりあり  
丈夫何うは怯るべし

○カムペベル氏英國海軍の詩

イギリス國の海岸を  
固く守きる水兵よ  
汝が建つる大旗は  
一千年のそのあむだ

戦争のみか嵐ををも  
敵を受く共たもみなく  
支應得たきは此後も  
勇氣の限りひるがへせ  
軍烈しくあらばあき  
嵐も強く吹かば吹け

立ちくる海の浪間よま  
汝を扶けたまふへし  
汝が祖先あらはれて  
蓋し祖先の軍艦の  
其甲板はてがらの場  
大海原の其墓場  
大チルソンヤブレーキの  
死にし處は人しのぶ  
軍烈しくあらばあれ  
嵐も強く吹かばふけ  
四方海なるブリタニヤ  
とりでも城も用はなこ  
山どたちをる波とても  
千尋のそまも淵とても  
慣れて我家に異ならず  
いかづちなせる大砲を  
船より放ち轟かし  
波をわけつゝ進み行く

軍烈しうあ疑ばあれ

嵐も強く吹かば吹あ

國の光とあてし旗

益々光りかゝやたて

危難を都て解け去りて

太平の日にをとる疑ん

其時汝つはものゝ

いさほし譽めて諸人が

歌に唱ひて悦びて

安樂限りなうるらん

烈しう軍すみし時

強た嵐のやみし時

○外交の歌

西に英吉利北は魯西亞。油断な爲せし國の人。外表に  
結ぶ條約も。心の底と測かられず。萬國公法ありとて  
も。いざ事あらば腕力の。強弱肉を争ふは。覺悟の前の  
となるぞ。嗚呼同胞の兄弟よ。御國に生れし甲斐あ疑  
ば。盡せや勵め諸共に。はこゝろ込てつくすべし

○テニソン氏輕騎隊進撃の詩

其一

一里半なき一里半

並ひて進む一里半

死地又乗り入る六百騎

將は掛れの令下す

士卒あは身の身を以て

譯を糾すは分な疑す

答をなすも分ぬらず

これ命これに従ひて

死せるの外は有さ疑ん

死地に乗り入る六百騎

其二

右を望めは大筒を

前も左望も又筒を

共に打出は砲聲は

天に轟くいかづちの

響の如之すさまじや

彈丸雨飛の間にも

猛り立てる進むなる

死地にあそ入れ鱗の口

勇んで乗り入る六百騎



其三

抜けは玉ちゆ刃をば  
きら／＼と輝ざり  
大砲方をふで切ります  
煙の中に飛込みて  
太刀の早業見事なま  
遂にさゝふる事ならず  
馬の頭そ立直は  
残るはひと／＼僅かなま

皆諸共に振あけて  
敵陣近く乗り掛あて  
最と目冷しを働させ  
烈しく陣を破れなま  
敵の軍勢たち／＼と  
群／＼とむら崩れ  
以前に進みし六百騎

其四

右を望めは大筒ぞ  
共々打出す砲聲の  
彈丸雨飛の其中に

左りも後も又筒ぞ  
天々轟くいかつちそ  
縦横むじん切り靡く

死地より出て乗り歸と  
歸ると元の一里半  
残るはいと／＼僅かなり

鱗の口より脱れ出く  
六百人の其中で

其五

あゝ勇ましき武士の  
手柄は永く傳へか  
とる年あまゑ重なりく  
頭に霜を戴きさく  
六百人乃豪傑が  
其古事を語りなは

世に香した其譽  
今のをさなご生立ちて  
腰は梓の弓となり  
孫彦やしやご多き時  
敵の陣へと乗り入れり  
末代までも名は朽ちじ

○ロングフェロー氏兒童の詩

來れしらはべ傍はらに  
我等が多年苦みて

汝か遊ぶさま見れば  
なはとけさりし疑は

忽ち解けて露やど乃

曇りも胸に止まらば

汝が遊ひゑはるゝを

見れば恰を東なる

窓打あけて日又向ひ

さへづる鳥の聲聞て

清く流るゝ川水に

臨むが如き心地せり

流流ゝ水も鳥の音も

照らばあさひも汝等の

心乃如くもたかなり

されど我等乃心中と

かなしき秋も過去まで

寒きも氷霜ふり又ぞり

童はへ無くば世れ中は

如何に苦しきとなれん

童はべ無くば我くは

後ふも向も憂さはかり

前を望むもやばたまの

闇の夜中又異ならず

知らばや茂れ森乃木は

いと美はとさ緑り葉に

清き空氣や日乃光

其作用を施しと

善き汁液を造り成し

幹と枝とを養ふを

知れよ開けき氣候をば

うけて早くも感とほと

幹はにあそいで軟かき

緑れ葉よてありぬるを

森を此世またとふれば

葉は童はべに比ふべし

來れ童はべかたはらよ

のどけき天を吹く風も

花に戯れ啼く鳥も

汝が清きあゝるよば

如何なる事を告るやを

我耳近くささやけよ

思慮を巡らし智を竭し 我等が成せる業とても  
我等が書ける文とても 汝が様のものはもさよ  
汝が面の樂しさに 比ふるとのあるべきや

人の賞する詩や歌と 世に數多くあるなれど  
完全無虧の汝等に 及ふへき者あらずかし  
汝は生ける詩歌なり 他は皆死にし言葉のみ

○西南の役よる凱陣せし人を祝する此歌

久方の 空を長閑に あら玉乃 春を迎へて 秋  
津嶋 風も靜に 祝ひつれ 程もあらせず 武士  
の 八十氏川に 立ぎわぐ 波のよれひは いと  
まみく 君は臣らを引連れて 臣は君にも 従ひ

て 軍の庭に 魁かあて 打つ討れり そがあか  
に 實にいやましき 大丈夫の わらねは死らら

二人程づれ 向ふ矢庭に 飛ゆるは 雨か霞か  
白龍の岩をも碎く 黒鐵の 玉に當りて は死

からは 世になれ人と ぬりにきと 古郷人は  
傳へ聞き皆打守りて 歎きある 折しを事ぬく  
歸程来てめぐり逢瀬の ありあるは おはらたけ  
をの 潔ぎよる倭心を 去るしめと 弓矢の神の  
恵みにて いさをいせ々に遣はぬらん

反歌

をろがねの玉もとほらす大丈夫が  
君につかふるやまと心は

○小楠公を詠するの詩

嗚呼正成よ正成よ 公のせつ去のこのかたは  
 黒雲四方にふさがりて 月日も爲る光りなく  
 悪魔は天下を横行し 下を虐げ上をさへ  
 慢とて果てし上とせず 吹き來る風は腥ぐさく  
 絶る間乃なき人馬の音 春を來れどを花咲かす  
 芳野の山に花見むと 訪ひ來る人と絶てなく  
 君御代ころ千代々々を 囀る鳥の聲聞は  
 いづれれ時<sup>れ</sup>に有あるや 嘆かはしきの至るあり  
 嗚呼大君の御爲に 振ひ起りてけりきたは  
 この世の塵を洗はむと すは人として非ざるか

遠くあなたを見渡せば 金剛山は蕪峨として  
 雲の上まで屹立し 繁る林の木の間よ

見ゆる菊水 其旗は 實にふと國の寶らなり  
 父に賜ひし此刀 腹をたれとの爲なはず  
 賊の頭らを斬らせむ爲 憎さをにまじ彼の賊等

國の仇なす父の讐 斬て捨ず<sup>に</sup>置くべしや  
 拂へて來るは夏の蠅 頃は正平 戌子の春  
 熟ら思ひぬまらせは 元來とて此かちだ

若しを病に冒されく 空しを失せし事おらは  
 不忠不孝と誹とられず 討死するは此時ぞ

死出のおこりに今一度

願ひかなひて親面た程

君の御影を伏し拜み

生て飯乳のみことどの望

聞て切なれ胸のりち

哀れといふも愚かお望

書き残しある梓弓

引きてかへらぬ赤心を

誓ひ志者と百餘人

雲霞乃如き大軍を

物どもせずにきりまを程

君の方をは枕して

討死せしはいやまよや

勇しかつる事共な程

都も遠き村里の

女とらへに至海はく

忠臣孝子乃鑑そと

譽れ其名は香玄く

天地と共に傳はるん

天地と共につゑはるん

○世渡りの海

宜も出来たり實りたり

往來の人も稻のなみ

わけて今年の秋獲を

見れば農はとよき業の

又ど向らしな國本も

こゝ又基るし民命も

爰又かゝると聞あらし

劍をうりて鐵をうり

とき返しても長き日の

腕も肘も脱けさりに

そき乃みならず霖雨や

早に水のかげ引や

夜目寝ずに引板の番

さるに一日野も山も

野分の風乃無慙やな

泣くにもなけず取分て

世の常なきを啣つより

外に詮術なありけり

嗚呼六つかしの世渡や

物うる業はむかところ

賤しといへど今の世は

國の光も身の幸を

もどむる道もあは外に

非じときけば矢も楯も  
輸出輸入の平均や  
取もどさんと健氣なる  
お座な之外れ幔幕の  
賣れば借死れ買へば損  
死へて果敢なき雲霞  
世の常なきを啣つよ  
嗚呼六づかしの世渡や  
棹一本に浮々と  
遊びがてらに渡ちるゝ  
危険を怯ぢず畏きずに  
日頃の伎倆顯はすは  
よるべき蔓を求めぬば

はや溜らじと投げ捨て  
彼に得られし商權を  
胸算用の正鵠は  
設け處が埒をぬき  
杖と頼みし資本も子を  
あらまの庭の花紅葉  
外に詮術なかりあり

此所の泊程や彼所の港  
舟子も暴風乃危険あり  
名譽北海に乘程出し  
いと易けれと夫とても  
よま覓せとみ其蔓も

共に根はなきろき艸は  
誘ふ人なき身の不運  
月に嘯き花に酔  
世の常ぬきを嘆つよ  
世とたる業は多けれと  
つきて廻るは諺の  
おなじ羽色の蝶鳥は  
其生活は習ぬより  
傍目をふ疑す一すらも  
又あすよりと工夫して  
其熟練の遺傳とに

憂と艱難をよるに見て  
はり裂く胸を押鎮死  
流るゝ水を友として  
嗚呼六づかしの世渡や  
彼に利あきば此に害  
畔を走るも田を飛ぶも  
ねろかな事よ細虫す疑  
なれし手業を怠らす  
明日へけふより明後日は  
祖先の立てて計書と  
光りを加へ漸之に

願み進めはおのづから  
一日と樂に傍目より  
嗚呼ひとやすの世渡や

我をしらすに今日より  
羨むこゑをまく時は

○送學友歸郷歌

五年六年諸共に  
互に勵みはげまこつ  
光のさけき春の日や  
五月雨晴れぬ夏の日も  
いと樂しや過しざり

同じ學びの窓の内も  
慰められつ慰めつ  
月かげ清き秋の夜や  
雪ふりしきる冬の夜も  
いとうれしく暮し晷

昨日諸共住みなれし

五年六年とく立ちこ  
學びの舎を出たりし

明日の旅路に出船の  
かままだち今祝ふあり  
いざやはせし其酒を

ともなふ師なる君達の  
祝の酒をすしむなり  
いざやくめし此酒を

歌へや舞へや皆共に  
今日を限ぞ明日よつは  
敵といふは忌言葉  
難事も難事ならず  
聲をば雲井上るなる

舞屋や歌へや諸共  
又逢ふ事の易きやは  
雲をり排く心あは  
月の前ゆくやとぎす  
あれ見よ高く上る於

さはいる心有明の  
行衛思へばやたてやな

月影うくす村雲の  
浮世の事に似たる哉

朝は淺間の烟りありも  
天と地との間をば  
隔てはあらじ西東  
同じ團坐の友人よ  
浮世の事と何事も  
さりとて心れくらすか  
斯くして後に思ふ事  
風ふき拂ふ雲間より

暮は鞍馬の霞みかも  
家となしほゝ過る身は  
北も南もみな同じ  
雲になや然る月を見も  
思ふまゝにはおらぬ共  
耐へよ忍べよ怠るな  
かなふ者とよ見とや人  
月は出たり顯はきたる

嗚呼面白乃景色やな  
明日乃別きの最つらき  
取れや人々酌む酒の  
深に契りを忘れぬと

そぞろろ身立つ 思哉  
愁を掃ふ玉は、  
つたぬた然きを有磯海  
寐ずもあれや今宵一夜

月をろ共にやさらはで

歌へや舞へや明ほまゝ

御國を守れ

來たれや來れはぎきたれ  
よせくる敵は多くとも  
死すとも忘りゆく事なかれ  
御國の爲なま君たぬ先  
玉はあられと飛ひくるも  
ためろろ事なく進みゆけ  
御國の爲なり君の爲

御國を守きや諸共よ  
おそるゝなかれ恐るゝな  
憎さをにやし彼の賊等  
進めや進めや身を進め  
劔はたやしを爲とても  
死すとも退く事なあれ



20-19

明治十九年六月一日御届  
全 年六月廿日出版

(定價十錢)

編輯兼  
出版人

石川縣平民

宇都宮源平

能美郡小松京町  
七十六番地

發賣所

愛文舎

